

号外 北海道建築士

HOKKAIDOKENCHIKUSHI 2016.10.1

目次

- 第41回全道大会(室蘭大会)開催1
- A分科会、B分科会.....2
- C分科会.....3
- 青年サミット.....4
- 編集・発行:(一社)北海道建築士会
情報委員会

URL <http://www.h-ab.com/>

ようこそ！鉄と湯けむり・西いぶりの大地へ

第41回北海道建築士会全道大会(室蘭大会)開催

第41回北海道建築士会全道大会が9月30日、10月1日の両日、室蘭市において開催された。室蘭開催は3度目16年ぶりで、大会は306名の参加者のもと、テーマ「鉄と湯けむり・大地のめぐみ」、サブテーマ「西いぶり共生の未来」を掲げ、青年サミット、分科会で熱い議論が行われた。

1日、大会式典が蓬峯殿で開催され、大会実行委員長の半崎室蘭支部長から、室蘭支部総勢150名を代表して心よりの歓迎とお礼の言葉があり、多くのご来賓のご列席のもと開幕した。最初に北海道各地で発生した自然災害により被災された方々へのお見舞いの言葉があった。続いて、かつての室蘭を中心とした大会から16年という時を経て、3市3町からなる「西いぶり」という地域の連携を大切にしたい大会としてテーマを掲げて構成したこと、さらに当地は山あり、海あり、加えて第一次産業から第4次産業まで揃っていることなどは国として独立出来るかと思うほどである、とのアピールをされた。最後に西いぶりでの大会が実り多きことを祈念して結びの言葉となった。

続いて、高野会長から第41回全道大会室蘭大会の歓迎の言葉と共にご来賓ご臨席へのお礼があった。9

月の台風被害へのお見舞いと、4月の熊本地震における広域支援要請に基づいた応急危険度判定士の派遣を実施した。本会ではここ数年、東日本大震災の事例にならった地域完結型の応急危険度判定を目指して2支部が地元自治体との協定を結んだところである。今後、住民、行政、建築士会と一緒に地域防災、安全な生活を目指してゆくことを期待する。

室蘭市は北海道有数の工業地帯であり、風光明媚な地でもあります。西いぶりの持つ多様な地域資産を生かし、建築士と共に考え、地域の未来を探る機会になるよう期待すると述べられた。

最後に多くのご来賓の中から、須田北海道建設部建築企画監、青山室蘭市長、三井所日本建築士会連合会会長からご挨拶を戴いた。会長表彰では20支部26名が受賞され、室蘭支部服部様が代表して感謝を述べられた。

基調講演は「映画と私とふるさと西いぶり」と題して、室蘭市在住の映画監督の坪川拓史氏を講師に迎え、監督になった経緯、トリノ国際映画祭で日本人初の受賞の快挙、西いぶりの魅力を世界に発信するプロジェクト、等々映画への熱い想いをたっぷりお話戴いた。



A分科会**素材～天然素材のほたて貝～西いぶり編**

北海道の名産である「ホタテ貝」は、ここ噴火湾に面した西胆振地区でも養殖が盛んに行われています。年間生産量が40万トン。その半数が噴火湾産です。貝柱を取り除かれた貝殻だけで年間16万トンも生み出されています。この貝殻の特性を生かし、付加価値をつけた建築用塗り壁材として再生した「ホタテ漆喰」。この優れた材料を建築士がどう活かし、消費者へつなげていくかを考えました。

講師には小松建設㈱および、あいもり㈱の代表取締役である小松幸雄氏をお招き、お話をうかがいました。「ホタテ漆喰」の特徴としては、まず自然素材だということ。貝殻は炭酸カルシウムのため科学物質を含まないので、ホルムアルデヒドやVOCを放出しません。そして優れた調湿性能と消臭効果もあります。カビやダニなどのアレルギーの発生を抑えます。アルカリ性の性質が防カビ性を発揮する素材なので、塗り壁骨材として優れています。クラックに強く、不燃性でもある左官材料です。

リフォームの場合はクロスを剥がすことなく、下塗りの上、ホタテ漆喰を施すだけなので、工期が非常に短いということで、リフォームにも最適です。

道内で多く産出されるホタテ貝殻を活用することで、漁業従業者の収入もUPし、北海道経済にとって、なくてはならない産業です。美しい仕上材として、また自然素材として地域経済の活性化、および産消協働として広めていきたい材料です。



▲講師の小松幸雄氏



▲ホタテは食ってよし、塗ってよし!!

B分科会**歴史×観光×ものづくり
～室蘭のまちづくりから学ぶ～**

工業都市でありながら山や海などの自然が広がる珍しい都市、それが室蘭。ここには「鉄」から生まれた工場夜景やボルト人形、「室蘭やきとり」など歴史の深い食文化、都市と自然の融合による景観など観光資源は多い。しかし、これら資源に潜在している可能性を十二分に発揮しているとは言い難い……。

分科会前半は、基調講演講師の坪川氏制作による「砂がおしえてくれた街」を含めた市の広報動画で室蘭を学び、続いて「歴史×観光×ものづくり」の視点から、それぞれの分野に軸を置き積極的にまちづくりに邁進されている御三方から御講演をいただいた。

仲嶋氏（観光）からは数々の誇れる観光資源がありながら、それを活かしていない受け入れ体制などを、三木氏（ものづくり）からは作り手の担い手づくりや活動を継続するための顧客発掘などを、そして白川氏（歴史）からは子供の頃の体験がまちづくりへの愛おしさを生み、じゃれ合うことが良い発想を生むことなど、活動内容と抱えている様々な悩みについて参加者全員で共有した。

後半は、「パネリストから建築士への質問」に対する、参加者からの「視点を変えたよそのもの」の声で、今後の室蘭のあるべき姿とそこに向かうため必要なこと（もの）についてディスカッションを行った。私達の課題でもある「若いメンバーの増やし方」では、「ちょっと手伝って～」から始まりっていつの間にかのめり込んでいる、そんなアプローチからの広がり的大事である。また、企業に依存しないまちづくりをする

為には、諂（へつら）いから感謝へ転換することで企業も市民としての郷土愛を持つのではないか、そのための体制づくりが必要だ。など多くの議論が交わされたことで、この場の意見として一つの方向性が見えた。室蘭には種々の観光資源があり、各々をまちづくりへ繋げようと活動している人達がいる。それらの点を線へ、そして面へと発展させ、その結びつきを如何に強く出来るかが課題であり、そのためには分科会テーマにある「～×～×～」が表すような、さらなる「連携」を目指した活動が求められているのではないだろうか。

坪川氏の広報動画で、「派手なものはないけれど、大げさなものもないけれど、わたしの街は玉手箱。小さな小さなたくさんの、宝物がとる街」という語りがあった。まだまだ多くの宝が眠っている室蘭に対する、参加者の羨望の眼差しも感じられた分科会であった。



▲熱い想いのパネリスト



▲参加者からの意見

C分科会

避難所運営ゲーム（HUG）を通して、 建築士の役割を考える

8月中旬以降、相次いで上陸した4つの台風により甚大な被害を受けた北海道。多くの方が避難所に身を寄せたと報道されたのが記憶に新しい。C分科会では、本誌10月号で被災地応急支援委員会より報告のあった避難所運営ゲーム「HUG」を通して、建築士として何ができるかを探った。

参加者は80名。10班に分かれて、簡単な自己紹介、グループ内の役割を決め、早速、設定条件を確認。『今は冬の日曜日の日中です。北海道を震源とする内陸直下型の巨大地震が発生し、あなたの町でも激しい揺れを感じました。ここは小学校の避難所です。校舎と体育館は耐震化が済んでおり、大きな被害はありません…』と続く設定に加え、ライフラインの状況、避難所の設備・備蓄状況、避難の状況、住民組織などを確認し、ゲームスタート。次々と読み上げられるカードの情報を基に、グループ内で話し合い、即座に避難場所を決め、図面にそのカードを配置していく。別室にする必要がある人は？足が弱い人は1階？あとから車いすの避難者がいたら移動してもらえる？授業の早期再開を視野に入れた場合、使えない教室は？情報提供カードによる設定の変更やイベントカードによる要望事項にどのように対応するか？はじめは、悪戦苦闘しながらも徐々に慣れ、スムーズさを増していく青年建築士たちは、たいへん心強く見えた。災害は忘れた頃にやってくる。その時のために、この経験を記憶に一日も長く留めておくことを期待する。



青年サミット

「鉄のまち室蘭からものづくりの原点を感じる」

青年サミットは昨日午後1時30分、室蘭建設会館に全道から集まった青年建築士約100名の中で始まった。

冒頭、北海道建築士会、石塚青年委員長の挨拶があり、その後北海道建築士会の高野会長、また日本建築士連合会青年委員会の安田委員長からも挨拶をいただいたのち、室蘭支部のばん澤青年委員長より今回の青年サミットの主旨として、「ものづくり」は人々の思いや夢を形にする大切な役割を担っており、「ものづくり」の現場を体験することにより、建築士も建築を通して、人々の思いや夢を形にする「ものづくり」の原点と今の室蘭を感じていただきたいとの説明があった。



▲サミット会場

主旨説明のあと、室蘭市入江にあるサミット会場から参加者はバス3台に乗車し、室蘭市輪西にある新日鉄住金室蘭製鐵所に移動した。

製鐵所の見学用事務所では、明治42年から始まる製鐵所の歴史や、会社概要、製品等の説明を受けた。

その中で、新日鉄住金室蘭製鐵所の敷地面積は、室蘭市の行政面積約80平方キロメートルの10分の1、8平方キロメートルあること。室蘭市の固定資産税の約20%が新日鉄住金室蘭製鐵所分であることなどから、鉄のまち室蘭を十分に感じさせられた。

説明の後、バス3台にて広大な敷地内の製鉄、製鋼、

圧延等の工程を担う高炉等の各設備の見学を行った。

特に鉄鉱石から2000℃以上の温度で銑鉄にする様子や、銑鉄から連続鑄造機にて鋼になる様子、棒鋼製造工程、その熱等を利用した発電設備など、鉄のまち室蘭そのものの施設見学であった。



▲施設見学の説明

新日鉄住金室蘭製鐵所の後は、旧絵鞆小学校の円形校舎、祝津展望台からの白鳥大橋等の見学を行った。

見学会終了後、会場に戻り北海道建築士会針ヶ谷常務理事より好評をいただき、今回の青年サミットは終了した。

鉄のまち室蘭市はものづくりのまちとして長い歴史をもち、今もその伝統を受け継ぐ技術や人物がたくさん活躍している。「ものづくり」の現場を体験することで、その原点を身体で感じてもらい、「ものを造る」ということの大変な役割を担う建築士であることを再確認した青年サミットであった。

編集後記

心地良い秋晴れの中、2日間に渡り湯けむりに負けず熱気ある大会となりました。今回も何とか時間内で編集を終え、皆様のお手元に号外をお届けすることができ一安心しています。来年も号外を出します!!! 後志でお会いしましょう。

編集発行／北海道建築士会情報委員会

早川陽子・斎藤勝哉・森 勝利・高松 徹
熊谷 智・柳山美保子・鈴木雅人・柏倉昌憲